

現代科学と現代政治

異質化する政治の歩み

井原末九郎

個と社会の關係の認識

大沢正道君は、「黒の手帖」一号において、人間と組織の關係を、重要な問題点として取りあげている。これは我々にとつて、最大の関心事であると共に、又、次第多岐道への開拓事業でもある。人間と組織。これは社会思想の観点よりの組み合わせである。自由と秩序、個と社会、相互排斥性と相互扶助性。これは哲学的な観点よりの組み合わせとでもいふべきか。政治的に組み合わせれば、人民と政府、人権と法律の關係であるといえる。

この個と社会の關係について、対立關係として考えるものと、相互反映現象として考えるもの、二様の考え方があると思われる。絶対概念により貫かれていた所の、ニュートンに代表される古典的な科学、マルクスに代表される古典的な思想においては、これを対立の關係として取りあげている。古典思想における個の人格、社会の人格の認識については、個と社会の關係現象を抜きにしての、又各々独立のものとしての、前提により取り扱われている。それで個

の人格と社会の人格の絶対性の追及とならざるを得なくなり、個の絶対人格と社会の絶対人格の対立へと発展していくのである。アインシュタインの相対性原理、ミンコフスキーの非ユークリット幾何学を入口として、進展の途上にある現代科学においては、この關係を相互反映現象として取りあげている。これは個と社会の關係を抜きにしての、個と社会の存在性は認められないということである。すなわち個と社会の認識は、個と社会の相互反映現象の中にしかない。この相互反映現象の中でのみ、瞬間的独立個、瞬間的独立社会を認識する、と理解してよいと思われる。瞬間的独立個、瞬間的独立社会とは、現代科学におけるエネルギーと同質のものであって、このエネルギーとは存在そのものである。

絶対概念により貫かれる所の、外形的な人間と社会、及びその環境の分析は、殆んど説明し尽くされて余す所がないといえる。これは古典的な科学と思想の、絶対的と思える程の強味の支えであると共に、現代思想の胎動への芽生えを摘み取るための、誤れる正当性の主張の裏付ともなっている。絶対概念による内的人間社会の探究

は、未だに門の前をさまよっている有様で、今後にまつことばかりである。しかし現代においてはすでに、もうもうの現象の理解と処理について、外形的な、固定的な、絶対概念意識をもってする事の困難さが痛感され始めている。どうしても、内的な、流動的な、相對概念意識の導入の必要性を強く求め始めてきたのである。そしてこの対立とも思える絶対概念意識と相對概念意識との關係は、対立ではなくして、その相互反映現象における、バランスの歪みとも考えたい。いい換えれば、相互反映現象における表と裏、外形と内容、物質と精神の、アンバランスの關係の調整へのうごめきであるといえる。

神秘の彼方にあると思われていた相對概念の、もうもうの所産現象の中で、我々に身近かに、わかり易く接近してきたものは原子力エネルギーである。この原子力エネルギーの政治と生産への参加、否参加の期待による氣配と雰囲気は、古典的な資本主義的、社会主義的、『政治と生産』を、現代的政治と現代的生産の状態へと組み替え始めつつある。この組み替え作業の初期的現象として、高度経済成長という現代の自慢である所の、経済構造異質化への過程に足を踏入れた。そして資本主義及び社会主義をして、異端児修正主義の方向へ追い込みつつあるのである。それは現代において修正主義として、すなわち同質的経済構造の変質として受け取られているけれども、実は修正主義ではないのであって、異質化への、体質替えへの胎動の現象であると考えられる。この修正への、否、異質化への作業こそ、絶対性の基盤への抵抗の姿、無権力的雰囲気の方角への姿を指し示すものであろう。

人間と組織の關係の検討の際、大沢君も述べているように、マル

クスを脱却しようとして、前進的姿勢づくりの体整固めの途上にあると思われる所の、谷川、吉本、植谷君等の組織論にしても、存在と觀念の混入に禍いされて、混乱に落ち入っているものと考えられる。すなわち人間と組織の關係の考察に当って、相互に反映し合う現象として、素直に取り上げたにも拘わらず、その思考手段の習慣性の禍いにより、何時の間にか古典的理論の展開に逆戻りし、絶対性の幽霊の虜となつて、完全人間の集團的雰囲気の中に包み込まれてゆく。アナキズムにあつても同様に、理想の人間と理想の組織は、常に何処かで顔をのぞかせる。「古典的革命觀への訣別」を提唱する大沢君にしても、自由連合社会を組織善とし、政府行政機構を組織悪とする認識の上に、理解の絆をほどこうとしていると考えられる。

未来のことについて、我々に分っていることは、我々個体の死滅と、巨視的世界、微視的世界における消滅、又は減少の方角だけだといつても過言ではないと思われる。恐らく完全人間、理想社会は消滅、死滅の中に、完全人間、理想社会への方向は減少、又は分散の方角の中に見出せないであろう。すべての理想像の結実、すべての集中への完成は、一面的にははばその目的は達成された。然るに現代においての、その完成的なものそれは、躍動の前進への阻害としての存在にすぎなくなりつつあるのである。完成的なものとは、勿論、現代まで榮え、君臨してきた所の、古典的な思想、倫理、道德、芸術、政治、経済、文化、生活、習慣等のすべてである。すなわち我々の理想は、世界觀は、上述の古典的な、そしてすべての完成的なものに対しての、分解行為―破壊行為―瞬間的抵抗行為の中に見出すより外ないと考えられる。すなわち相互扶助的

生活観との訣別の上に、相互排斥現象の正しい認識による生活観の把握こそ、我々の現代的理想像解明への、主たる解答者であると考えていいのではないだろうか。単に、古典的理想よりの脱却を計っても、それへの郷愁の絆を遮断出来ねば、世界革命への夢、自由連合への夢、人間理想化への夢、ひいては理想政府への夢は果てしなく続き、政治の浄化―黒い霧退治―などという講談もどきの、理想政治への筋書きに胡麻化され、集中権力の座を安泰にするばかりでなく、自分自身の存在をそのものを見失う事になるであろう。

古典的な科学及び思想は、完全―神―、無限―平行線―、静止―固定―、の三つの絶対概念によって支えられ、その論理は目覚しく発展し、完成された。運動の法則にしても、勿論この三つの概念を基本的要素として組み上げられ、その構造は見事なものである。これに反して、現代科学は、矛盾、有限、流動―不安定―、の三つの相対概念により支えられている。すなわち、古典的論理を支えている完全概念の、否定の場の呈示であるといえる。そして、それは雑然であり、無統制であり、気紛れであり、反法的あるにも拘わらず、なんとなく秩序の中に納まりかえっている。これは現代論理―非論理―によってしか理解され得ない性質のものである。古典的論理へ、現代論理―非論理―を導入し、古典的論理の発展に努力する愚は繰り返してはいけない。アインシュタインの導入によるニュートンの発展は見られなかった。ニュートンを足場にして、ニュートンとは異なるアインシュタインの発展が見られたのである。このように古典的科学を足場にして、それは異なる、体質替えした現代科学の発展は見られつつあるといえる。しかし、これにより、近視的世界における絶対概念の価値は減殺されるということにはなら

ない。それは古典的科学の完成がなかったら、現代科学の生涯は見られなかった事は明瞭であるからである。しかし、現代の思想界におけるマルクス、バクニンへのこだわりは、現代思想への芽生えの若芽を、摘み取る働らきをしているようなものでしかない。マルクスに代表される古典思想の発展への作業との断絶。唯物史観、相互扶助論との訣別。これこそ現代思想発展への必要条件であり、この現代思想の示す方向は、政治の現代化―現代政治のよって立つ基礎の崩壊現象―を呼び起す事になるであろう。

人間と組織の関係を考察するに当って、私と大沢君の意見は一致していない。私の八方破れの組織観は、大沢君の組織論との間に、相当の距離を痛感せざるを得ない。しかし、それぞれの組織観の肉付け作業が進むにつれて、接近の可能性の多い事は疑う余地が甚だ少ないといえる。それは、彼にも、私にも、権力嫌悪の心情という、どうにもならない共通点が多いという事である。世のアナキストと称する人々の、唯一の共通点は、この権力嫌悪の心情に外ならないと考えられる。このとどめなく流れる権力嫌悪の心情は、論理の説得のききにくい体質に組み上げられ、法則性への奴隷化を拒否する。そして、疑問の提出に素直であり、「制約の論理」への抵抗感に充滿するこの状態は、真の存在探求への最短の姿勢にあるといえる。この権力嫌悪の心情こそ、現代思想、現代政治への温床に外ならない。

組織と無関係の人間は認識する事は出来ない。人間を切り離しての組織も、勿論考えられるはずがない。人と人との関係そのものが組織であり、組織―人と人との関係―により初めて認識されるのが人間である。この関係こそ、人間と組織の絶対性を否定し、その相

対的存在を呈示するのである。然るに現代の論理は終局的には、人間と無関係に組織の人格を、また組織と無関係に人間の人格を形づくる。思考の手段として、人間という、組織という固定の人格を想定し、その固定の人格を、相対の人格の方へ移動させるといふ方法は、常に用いられる事であるけれど、その流動的な、触媒的性質の人格を、不動の、固定的な絶対人格として、すりかえて取りあげる所に、現代論理の非現代性が窺えるのである。これは、零、無限大、一、等を存在として考えるのと同様であって、一と一の関係、すなわち二以上の相互関係のみ存在である、という現象を見落したために外ならない。にも拘わらず、零、無限大、一、等の観念的存在と思われる要素を度外視しての、二以上の関係現象の認識は、不可能であり、また観念的であるのは勿論である。

このように人間と組織の関係は、不可分密接にして切り離す事が出来ない。にも拘わらず、人間は、自ら造り出した組織の拘束性に対して強い抵抗を感じ、その組織をこわしたがる。しかし、また組織の庇護性に対しては、極度の信頼感、依頼感により対面する。これに反し、組織は常に人間の奴隷性を要求すると共に、組織維持の重大な要素として、人間の自主性に依頼する。庇護せよ、拘束するな。自主的であれ、隷属せよ。すなわち、人間は組織より庇護される事によって、その隷属を強いられ、自由を極度に制限される。組織は人間の自主性に依存することによって、その自由の原則を認めさせられ、その拘束性を弱められる。これは人間と組織の矛盾関係として、止揚になだれ込む性質のものでなく、人間と組織の関係は相互反映現象としての存在であることを物語っているのである。正→反↓合、止揚として思考した事存在性は、この相互反映現象

におけるバランスの歪みの一句であると考えられる。こうして、人間と組織の対立、矛盾は、新たな角度よりの再検討の場を迫まらされているのである。

然るに現代思想界は、未だに古典的哲学観のメッカである。思想界が、このメッカを宝物として大事に抱え込んでいる間に、科学、産業、芸術、倫理、道徳、生活、風俗、習慣等の場における、庶民的感情の素直な表現は蔓延しつつある。そして、この庶民的感情の昂揚は、固定的な、角張った虚偽により粉飾されている旧体制の一切を、洗い流す勢いの兆を見せてきている。常に旧体制より、統一が無い、わけが分らぬ、修正思想だ、利己主義だ、人間疎外だ、テロだ、行き過ぎ、はね上り、無責任、不道徳、厚顔無知、アブレ、生意気、等々、現代を築いた思想、道徳観での、最大限の概念的悪罵を受けながらも、旧体制への抵抗の作業はたゆみなく続けられていく。すなわち、旧体制への庶民性の攻撃行為、破壊行為、黙殺行為は、甚だ苛烈に、着々と進められつつある。過去数千年にわたって築き上げられた古典的論理及び、その指向するイデオロギ―は、今やその土台はゆるぎ始めた。この画期的な転換期に立つ我々は、現代科学の進展を足場にして、高揚され始めている庶民性の、目覚めの価値の認識に務めたい。

しかしこれらの旧体制は甚だ頑強である。人間を組織へ従属するものとしての原則は、簡単に改められるはずはない。社会主義社会の体制下にあつては勿論の事、資本主義社会の体制下にあつても、主体は常に社会である。人の上に人を造り、人の下に人を造る。これは旧体制思想の政治的根幹である。そして人権の問題は、この社会の制約―法律―の枠内で認められ、社会への奉仕の責任の従属

物として取り上げられているに過ぎない。各国の憲法においても、人権は基本的に尊重されなければならない、として如何にも民衆的であるかの如くに装いながら、法律、法令によってがんじがらめにされ、その人権は収縮され、ゆがめられている。そして人権を主張してやまない個々の抵抗行為に対する防波堤として、完全に尊重される人権を収容する容器、すなわち理想の共産社会、理想の自由民主社会の招来をもって糊塗する。そしてこの指針に対する疑問の提出に対しては、あらゆる方法で防害を図る。プロレタリア民主主義、ブルジョア議会議の理想像を庶民へ結びつけ、その正当性を裏付ける理論をこねあげるについては、世の御用学者、偽道学者、追隨思想家を総動員し、警察、軍隊、官僚組織の援護の下に、御用の教育、道徳、思想をでっちあげ、強制しているのである。

又、社会を度外視する自由の謳歌は、観念的人間性の主張は、ニヒリズム、ダダイズムへと方向をひん曲げて、人間を庇護する社会、すなわち組織との妥協を排し、反社会性の極度の表現と墮して、自己の存在の足場をくずし、自己否定へとつながって行く。このような荒筋により前者は非人間的、後者は反社会的の性格をますます強め、社会と人間の作用関係という実体を見失い、その理想論、空想論、観念論はいよいよ横行し、米政府のように、ソ連政府、中国政府のように、極度の狂暴性の発揮となっていくのである。日本政府にしても日米安保条約を軸として、狂暴性の発揮は徐々に進められつつある。

我々は、秩序と自由の相互反映関係という、實在体の把握への努力を重ねて、現代においての、政府御用の思想界における論理の非現実性、架空性についてゆかねばならない。このような作業を怠れ

ば怠る程、政府権力は、論理の上にあぐらをかき、御用道学者、御用教育者、御用思想家、御用ジャーナリズムに守られてますます狂暴性を発揮するであろう。ここに大沢君の取りあげた人間と組織の問題の検討に双手をあげて賛同するゆえんがある。

古典思想の後退性の断片

一九六七年初頭のテレビ放送の対談の一齣である。片や理論物理学の湯川さん。片や何処かの大学の文科系の助教授。学校も名前も記憶に残っていないのでその助教授を×君としておく。湯川一限りなく続くということ、無限という事は考えられない。そして又静止という事も考えられない。常に流動する事しかないのだ。という事は、何処かで、どうかなるのかも知れない。又完全への論理には疑問が持たれるのではないか。――×君自分もそんな事を考えていた。西洋流の論理は行き詰って、東洋流の精神哲学が取って替るのではないか。中国の文化大革命にしても、西洋流の論理への、東洋人的抵抗の現れともいえる。――チャンネルを廻した時は大分進行していて、対談の終りの方であったけれど、要約すればこんな内容のものであった。

×君の中国文化大革命抵抗論には、湯川さんもさすがに持て余したと見えて、それもそうでしょうなどと、分ったような、分らぬような顔付きで相植を打っていた。そして、引続き表明しようとしていた湯川哲学の片鱗は、×君の心無き能弁の前に芽を摘まれた型で、出さずじまいに終ってしまった。そのため、多分本番であったはずの湯川さんはかすんでしまった。聞き役ではなかったかと思われる×君は、大写しに写し出されるという場面に転換されたのであ

容により支えて使う場合もあり得る。そのような相手の状態を悉く理解する事は困難であるけれど、理解する努力の上に応答する事こそ、対話の価値を高める事なのである。この湯川さんと×君の応答はすれ違ったまま、×君の接点を求める事の一方的拒否行為により、湯川さんはねち伏せられ、×君の自己主張意志は一応貫かれたと考えざるを得ない。固定的な、完成的な、絶対的な法則性を信奉する現代思想家達の、内容の伴わない、暗記の量の豊富さを尊重する、難解な字句の、心の通わない組み合わせの羅列には、湯川さんならずとも、我々は常に苦しめられている。この絶対者の支配より早く解放されたいと望むのも無理もないことなのである。

ここに×君の独断と誤謬を二、三取り上げて、問題の一端を検討して見よう。

一、×君は、湯川さんのいった論理という言葉だけを、自分の理解の範囲内で、無反省に取り上げて、湯川さんの表明の全部を無視して、自分の理解の器にすり替えてしまった。絶対性を追い求め、謙虚さを欠く古典的社会思想の信奉者達は、常にこの×君のような横暴さを繰り返している。言葉の上では対話と称しつつ、その対話の内容は、対話の相手を、自分の思想のロボットに移しかえて応答することなのである。プロレタリア民主主義、ブルジョア議会議が、言葉の上だけの民衆思想であって、実質は民衆を組み伏せている権力思想であるのと同様に、名目だけの対話という言葉は、自分の思想の正当化の為に、現代の心無き思想家達に珍重される。湯川さんには、湯川なりの論理という言葉を支えている内容があるはずである。また対話の便法として、同じ論理という言葉、異った内

一、中国の文化大革命も、西洋流の論理への、東洋人的抵抗の現れではないだろうか。というに至っては噴飯事である。私には支那人に対する親近感が強かった。チャンコロといって、支那人を輕蔑した時代に育って、支那人に対して、侮蔑感をいだいていた事には間違いない。その反面、欧米人に対し、なんと無く劣等感を感じて、欧米人を毛唐と呼ぶ事によってささやかながら、自己満足を求めていた自分を発見する。そして中国共産党が徐々に勢力を増し、中国が大国として東欧諸国に優越するにつれて、欧米人に対して溜飲の下がる思いであった。国家、政府、共産党等といえは、全身虫酸の走る思いをするにも拘わらず、不思議に中国共産党は嫌いではなかった。非人間的な、ガサガサしたマルクシズムも、支那人の手に掛れば、中共という人間味を感じさせる組織に転化するような錯覚に襲われ、不思議を覚えたものだった。支那の広大さと、支那民族の理屈で割れない懐の深かさは、世界人類をあの奥行の深い不思議なムードに吸収するであろうという、怪談的雰囲気魅せられていたの

かも知れない。然るに突然起った文化大革命により、中国共産党も、やはり同種のマルクシズムの政党に過ぎない事を暴露した。これは当り前の事である事が分り過ぎる程分っていないながら、何と無く感に堪えないものを打ち消す事が出来なかつた。×君も東洋思想の、支那民族の不思議なムードを咄嗟に直感して、欧米人への抵抗を、論理へ抵抗する論理として、結びつけようとしたのかも知れない。しかしこれは即席であつたにしても、余りにも安っぽすぎた。中国の文化大革命は、西洋流論理への抵抗行為ではなく、西洋流論理、マルクシズムへの最も忠実な信奉者の狂信的行為である事は明瞭である。むしろソ連の修正主義こそ、マルクシズムへの現実的抵抗行為である。ソ連における経済成長の伸張は、マルクシズムという古い論理を否定する事を余儀無くせしめ始めている。ソ連政府は、平和共存路線を政策的なものと考えているようだけれど、実際はそうではなくソ連経済の欲求の表現であるのである。この×君のような心無き、思想無き思想家と称する数多くの人々の詭弁的能弁の為に、現代思想の表明への営みは、次々に潰され、新芽もがれつつある。このような障害は出来るだけ早く取り除き、真実の捕捉の作業を急がねばならない。

人権の主張——非合法と暴力

現代のように、人権尊重が叫ばれ、徐々に人権の拡充が見られている時代は、歴史上かつてなかつた事である。然るに、現代の政治において、人権と法律の相互反映現象面での歪みは、ますます大きくなりつつあつて、人権の侵害される現象は甚だ多い。これは矛盾である。この矛盾と思われるものは、一体何を意味しているのか。

つ所の、人権を庇護する法律は、次々に作られて行くであろう。即ち、瞬間的人権保護の目的をもって、作られるのが庶民的な法律であつて、その庶民的な法律は、固定する事を許されない。人権は、非合法と、暴力により伸張される性質のものであり、合法により庇護される。言い換えれば、人権主張の積極的表現は、法律、倫理、道徳、法則性への、背反、反逆、抵抗にあるのであつて、その積極的表現は、合法性、柔軟性にあるといえる。消極的表現に依る合法性は、固定化を要求し、権力の基盤を築き上げる事になるのは当然である。

このような訳で正当化された所の、人権主張の消極的表現により、処理、運営される固定的政治方式の弊害は、人権主張の積極的表現を、罪悪性、犯罪性として位置づけ、反倫理、反法律として取り扱う事にある。資本主義圏においての生命、財産は、法律により基本的な人権として守られている。この守られている生命、財産を犯すものは、犯罪として処断される。そして、その生命、財産を犯したものの人権は、犯されたものの人権に隷属させられる。資本主義国家のルールという、資本主義経済を基調とした所の、一面的場面における法律は、それ以外の数多の場面での、人権の主張を認めないのであつて、その主張そのものを犯罪とし、罪悪とするのである。社会主義圏においても、社会主義のルールに従っている、社会主義国家という一面的経済構造の場面における法律に、すべてのものが従うのであつて、やはりそれ以外の場面での人権の主張は、認めないのはいまでもない。ジャン・バルジャンの物語。泥棒にも三分の理屈、等という淡い庶民的抵抗感の比喩。共産圏における血の粛清。思想の教条化。これらは、体制維持のための人権の歪

すなわち、今迄述べたように、現代科学の進展に伴って、高度経済成長の伴奏の下に、あらゆる面での価値観の、急角度の廻転運動は奏でられ始めた。それに伴って、人権の巾は、人間の絶対自由の欲求——人間否定——を軸として拡げられつつある。これは人権伸張の現代的『姿』である。その反面、旧来の政治方式と道徳観の協調による所の、社会優先の価値観を尊重する旧体制は、自己否定——社会否定——を基調とする現代的方向への、急ブレーキを踏み続けているのである。これは現代的人権侵害の根源に外ならない。このような大転換期における自由と秩序の關係の歪み、人権と法律の關係の歪みの度合いの巾は、ますます大きく拡がると共に、逆に人権の主張は、後より引つ張る旧体制の制約を、法律を、引きずって伸張し続けるのである。過去における状況は、人権の伸張の躍動する環境を持たなかつた。むしろ社会中心思想を軸として、すべての面においての、社会的集中化が行なわれ、その中で、かすかな人権伸張への蠢きこそ、スペイン革命までの一連のものであつたのである。こうして、人権と法律の相互反映現象は、人類の歴史始つて以来、画期的なものはげしさを加えつつあるといえる。

従来、法律に限らず、固定化への社会的政治要求を、当然として受け取つて来たのであるが、現代の環境は、その固定化への要求を、やすやすと受け入れる状態ではない。法律も又然り。先程から述べているように、法律により人権は保護されている。その反面、侵害される運命にある所の保護されない人権は、その法律について廻つて、人権保護という大義名分の為に痛めつけられるのである。このように、人権庇護の反面を持つていても、人権侵害へ能動的な法律は、次々に壊されるであろう。そして又、人権侵害の反面を持

み、すなわち人権の侵害される有様を如実に物語っている。これらは、旧体制秩序維持の為の、固定化への営みのなせる業であつて、人権庇護の精神に立脚して、成立した法律そのものの問題ではない。すなわち、秩序そのものを——法律を——固定的なものとして理解、処理するか、流動的なものとして理解、処理するかの問題である。

人権の主張は、常に非合法の中に、権力へのささやかな抵抗としての暴力の中に、又旧体制破壊活動の中にしかない。然るに、革命といひ、クーデターといひ、労働運動と称し、平和運動と称し、又学生運動に名を借りて、あたかも人権主張の戦士であるかの如くに見せかけて、庶民的抵抗の場面に潜入してくる所の、権力斗争の、紛らわしい組織は又何と多い事であろうか。そして破壊活動者として法律の制裁を受ける者は、これらの権力斗争の具に利用する組織により、操られる庶民的抵抗者に外ならない。日本におけるこれらの偽抵抗者は、社会党であり、共産党であり、総評であり、原水協であり……其の他数多の左翼的なものを標榜する組織である事はいうまでもない。これらはことごとく自民党政府と同体質の、一つ穴の貉である事はいうまでもない。

近時起つた抵抗事件で、最も純粹で、敬意を表せられるものとして、田無の兵器工場襲撃事件がある。しかし、これさえ、その行為の支えとなつたものは、革命理論でなかつたとはいえない。革命理論に利用されることはあつても、その支えが、革命理論と遮断される事こそ、高く評価され得る事であると考えられる。佐倉宗五郎の一揆のように、米騒動のように、安保斗争最終段階において、共産党、社会党に非難、敬遠されながら、急速に盛り上つた所の、

あの庶民的抵抗の昂揚。これらが高く評価されるのは、革命理論とは無縁の、庶民的抵抗行為に外ならないからである。

日本における一九六七年度の総選挙で、公明党と民社党の前進は目覚しかった。これは一時現象であるかも知れない。しかしこの事は、庶民層に貫かれていた所の、野党的、庶民的な政治雰囲気の高望を表明しているといえる。イデオロギーと心中する社会、共産両党に対しては、その非人間性と非具体性に失望した。自民党に対しては、その対米接近による戦争への危機感を感じ、折角の高度経済成長への期待も割引されたと考えられる。これに反して、民社はイデオロギーの政党でありながら、イデオロギーをなくした左翼の浮浪児と蔑まれ、公明党はその指導理念の表現の、低級さ、幼稚さを指摘されながらも、この両者は、庶民的抵抗感の淡いはけ口として支持されたと考えてよい。観念的ではあるけれど、民社、公明の、平和に対する庶民的表明、又、高度経済成長への庶民参加要求の雰囲気造り、の人氣であったといえる。これは旧体制への庶民的抵抗が、選挙の場面に至る迄、あらゆる隙間に、常に間断なく、侵透しようとしている事を物語っている。公明、民社共に、旧体制の所産である事に間違いのないのであるが、現在の時点における、この両党の瞬間的雰囲気は、庶民的、抵抗者的存在である事の否定は出来ない。

このように、選挙を通じての政治の場面に於いて、すなわち人権と法律の反映関係現象面においての、庶民の直感とは、固定的な主義主張を尊重する、教育による習慣性があるにもかかわらず、現時点における庶民生活とのつながりという、流動的反映関係現象に、比重を強く置いたのであった。現代の映画、歌謡界におけるスターの

又、政治組織に対する嫌悪感を、どうする事も出来ない。こうして、末端権力への憎悪感、又、権力組織への嫌悪感、政治好きの反面を押し込め、抵抗の場面に押しやるのである。この抵抗行為への強力な執念は、反面、政治支配行為への、関心の度合の強さを物語っているといえる。

現代思想と現代科学の繋り、現代政治と現代科学の繋りの発見についての努力は、割合に等閑視されている。サルトル等、実存主義の哲学に一歩足を踏み入れたものの、思想、政治との関連については、存在的関連を避けて、論理へ逆戻りし、その関連を断ってしまった。すなわち、彼は、流動的関連の中へ足を踏み入れたにも拘わらず、彼の政治的、思想的活動場面においては、その固定的関連の論理に隷属して行動している。訪日の時のあの御説教は、サルトルのイメージをすっかり壊してしまった。文化大革命における中国と同様に、矢張り彼も、共産主義者でしかなかった。現代政治の存在性と、現代科学の存在性の繋りの求め。これこそ、我々現代人の誇りとする仕事であると考えられる。この簡単な事に気付かないのは、学者、思想家、哲学者、文化人等と称する、学問の奴隷である所の人種だけであって、庶民的感情は、すでにそれに気付かず、豊富な生活の中より引き出しつつあるのである。

(四) ページよりつづ

現下の経済面においては、CNTは階級闘争を採用し、ブルジョアジーとの戦いには、紛争中の当事者に対する部外者の力はいかなるものも介入を許さない。いかなる仲裁も妥協とみなされる。妥協は協力の原則である。資本家と労働者の利害は妥協しえない。しか

あり方も、固定的な大スターの存在要求は減少し、その時点時点での、瞬間的要求による群少のスターが歓迎される。これは、固定的価値観に対して、瞬間的価値観の庶民的認識であるといえる。政党にしても、その時点において庶民とふれ合う所の、政治の相互反映現象の場面においての、瞬間的存在性により認識される。指導理念、綱領等、固定的政党表現によって認識されているのではない。現代の庶民感覚による政治の認識は、このような、流動的な、相互反映的な形で行われる。田無事件そのものの評価は別として、田無事件のような、瞬間的組織による瞬間的抵抗行為、すなわち、極微的、光子的エネルギーと同質の、そのエネルギーそのものは、政治行動における素粒子的エネルギーとして、庶民により認識されるのも遠い事ではないであろう。これこそ、権力分散過程における、現代政治の認識の方法であり、序曲である。人権と政治の反映関係における歪みの調整、すなわち現代政治のあり方は、立法する建設行為と、違法による非合法破壊行為の、交錯する反映現象の認識に外ならない。

追記

この一文は、私のある構想の『はしがき』である。もし、私に文章を綴る能力があるとすれば、もう少し、きちんとした方法で発表するであろう。残念ながら、私には文章を綴る能力と、その作業を行う肉体的条件に欠けている。であるから、一応、整っている形での発表は出来ない。恐らく、断片的な形で、突発的な、無関連的な形での発表になるであろう。私は政治が好きである。そして、理想政治への魅力は、未だに捨て切れないものを残している。そして、

も多くの場合がそうであるように、国家が仲裁者であるときには問題が複雑になるのはいうまでもない。

すでに、資本主義及び国家との協力は、美しいが苦しい果実を実らせた。果実とは、いうところの改良主義、すなわち外観だけの改良、永遠の約束、引き延ばし、まやかしてである。社会主義と政治的サンディカリズムの改良主義的仕事を経験したことは、アナルコサンディカリズムにとって決定的だった。前述のレオン・ブルムの言葉の中で、社会主義と政治的サンディカリズムはみずからの傷口で呼吸している。

政治的改良主義は、資本主義国家と国家資本主義とにとって長寿の仙薬であった。労働者を思想的に去勢し、政治的社会主義を不毛にし、組合主義を家畜化する原因であった。

以下、本書を刊行することによって、我々は、スペイン革命にいかにかCNTが参加したか、CNTそのものがいかなるものであったか、その栄光と幻想と犠牲と欠陥と誤謬とが何であったかを公にしたい。

この第一巻は、革命と社会の問題に携わるすべての研究者、CNTについてこの三つの記号の文字しか知らない人々、アニドとアルレギの時代に、プリモ・デ・リヴェラの独裁の時代に、共和国の治安警備隊の銃の前に、一九三六年七月一九日に、内戦に、追放に、フランコ体制へのレジスタンスに、国家の弾圧の下で倒れていた我々のすべてに献げる。我々の意志を力づけ、情報や記録集めを助けてくれたすべての友人と共鳴者に献げる。そして最後に、新しい社会への出発に際し、我々を支援するために召集されたアナキストの若き世代に献げる。